

となし、検査所見では血清ガストリン値は329と高値、ペプシノーゲン I, I/II は低値を示し、胃液は無酸であった。胃 X 線検査で胃体中上部の大彎を中心に島状の隆起性変化が見られた。胃内視鏡の再検ではコンゴレッドテストで胃体中部大彎の島状隆起部のみに変色が見られた。生検組織検査では島状部には胃底腺の過形成が認められ、周囲は高度の萎縮所見であった。この症例は限局性過形成変化の多発を伴う高度萎縮性胃炎であり、胃炎の進展様式を考える上で、示唆に富むと思われた。

6. H₂-blocker および経腸成分栄養にて改善を認めたメネトリエ病の1例

(至誠会第二病院消化器内科)

小島真二・新浪千加子・古川みどり・
根本行仁・池田みどり・鈴木義之・
足立ヒトミ・黒川きみえ

症例は49歳、男性。1992年8月嘔気、体重減少を主訴に来院。T.P. 4.4g/dl と低く入院。胃内視鏡検査で噴門部から胃体中部にかけて、前壁小彎側に著明な粘膜肥厚および粘液付着が見られた。病理所見で腺窩上皮の増生を嚢胞形成並びに固有胃腺の退縮がありメネトリエ病と診断。血清ガストリン232pg/ml, PGI 312 ng/ml, PGII 123.5ng/ml と上昇。アルブミン製剤、中心静脈栄養では改善なく、3週間後よりファモチジン投与および経腸栄養に変更。約4週間後にほぼ寛解し、PGI・II も正常化した。退院後約3カ月間で治療を中止、その後も増悪はない。

以上、H₂-blocker、経腸成分栄養にて改善を認めたメネトリエ病を経験したので、若干の考察を加え報告する。

7. 当院における胃 MALT リンパ腫症例の検討

(財団法人防府消化器病センター)

菊池哲也・三浦 修・北畠滋郎・
松崎圭祐・川野豊一・戸田智博・
南園義一・長崎 進

(九州大学医学部第二病理) 八尾隆史

1983年に Isaacson らが MALT (mucosa-associated lymphoid tissue) リンパ腫の概念を提唱して以来、従来の RLH の多くはこの MALT リンパ腫に相当することが判明してきた。そこで1969年から1993年10月までの間の当院における胃リンパ系病変32例に対し病理学的再検索を行ったところ、11例の MALT リンパ腫を認めた。本疾患は低悪性度で、予後良好とされているが、我々は腫瘍死した症例も経験し

ており、進行すればリンパ節転移を起こすことが示唆され、特徴的臨床像を熟知し、早期に診断、積極的に治療する必要があると思われた。

8. 易出血性の粘膜下進展を呈した胃癌の1例 (県央胃腸病院)

吉利賢治・鈴木修司・田中 謙・
藤本 章・宮内倉之助

通常、胃癌の診断においては X 線検査および内視鏡検査により肉眼的に診断され、次いで細胞診や生検組織診により確定診断される。今回われわれは、肉眼的に粘膜下腫瘍形態を呈し、易出血性で頻回の生検組織診でも確定診断できずに診断に苦慮し、また病理組織学的にも胃粘膜下進展を呈する extremely well differentiated adenocarcinoma という珍しい症例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告する。

9. 早期胃癌を併存した胃腺扁平上皮癌の1例 (中山記念胃腸科病院)

片桐 聡・林 恒男・田中精一・
林 俊之・武雄康悦・今里雅之・
勝田和信・岩谷美紀

症例は56歳、男性。1993年5月より上腹部痛を自覚。内視鏡にて胃体部大彎側に Borrmann 3型胃癌を、幽門前庭部前壁に IIC 型早期胃癌を認めた。また、胃横行結腸瘻・肝転移を認め、胃全摘・横行結腸および肝外側区域切除術を施行。病理組織学的に、胃体部胃癌は腺癌成分と扁平上皮癌成分とが一つの病巣内に共存している腺扁平上皮癌であった。本症例の成因は、腺癌と扁平上皮癌の境界部で両者の移行部と考えられる部分が認められ、さらに免疫染色で、secretory component が扁平上皮癌成分の一部にも陽性であったことより、腺癌の扁平上皮化生の可能性が高いと考えた。また早期胃癌と脱扁平上皮癌の併存の本邦報告例は、検索した範囲では認めず、極めて稀な1例であった。

10. 胃癌術後に中心橋髄鞘融解症続発が疑われた症例

(¹)広瀬病院消化器外科, ²)同 病院脳神経外科, ³)同 院長, ⁴)東京女子医大消化器病センター)

遠藤昭彦¹・木村 健¹・福本 達²・
広瀬広人³・鈴木 衛⁴

症例は78歳男性。1993年5月下旬より嘔吐出現し当科受診となる。内視鏡施行し幽門部に Borrmann 3型の進行胃癌を認め6月10日入院。同17日幽門側胃切除が施行され病理所見は se, n2, stage IIIb であった。